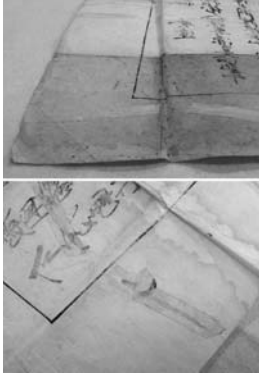


文書館の仕事⑬
文書の補修 その2

前回の「文書館のしごと⑫」文書の補修 その1」では、文書の埃はらい・皺伸ばし・カビの除去・継目の糊さし・題箋の糊付けなど、文書館で実際に行っている補修をいくつか取り上げました。今回は、破損箇所をセロハンテープや補修テープで貼ってある文書や、ホッチキスの針やクリップなどで綴じられ錆びの発生している文書、また折り目の破れた地図や破れた公文書などの補修について、具体的に紹介しましょう。

セロハンテープ・補修テープの除去
用具 アイロン(手芸用もの)・あて紙(和紙など)・ピンセットなど

古文書や公文書などには、破損箇所を補修するためにセロハンテープや補修テープで貼り合わせたものがあります。テープの粘着剤は、年月とともに紙にダメージをあたえ、液化化して貼った部分がべとべとになったり、紙が茶色く変色してもろくなってしまうので、なるべくすみやかにがします。テープが硬化し



補修テープが貼ってある文書

ていて簡単にはがせる場合もありますが、はがしにくい場合は、はがす箇所を少し水で湿らせ、文書にアイロンが直接触れないようにあて紙をして、低温のアイロンの先で少しずつ熱を加え、粘着剤を柔らかくしてから、テープの端をピンセットで持ち上げて慎重にはがしていきます。柔らかくなった粘着剤が紙に残っている場合は、別の紙をあてて少しづつ粘着剤を吸着させて取り除きます。粘着剤が取り除けない場合は、その部分に修復用の楮和紙を貼っておくと強度が増し、粘着材による紙の分解の進行を遅らせることができます。粘着材が他の部分に浸透しませんでした。またはがした部分が破れていたり穴などが開いている場合には、修復用の楮和紙をその部分に貼って繕っておきます。固着した粘着剤の溶剤処理や削り落としは、文書を傷めてしまう可能性があるので行っていません。

セロハンテープや補修テープはいったん貼ってしまうと紙を傷めずにはがすのは困難なので、文書に使用することは絶対に避けましょう。

金属類の除去

用具 綴じ糸(木綿糸や麻糸)・紙繕り・針・ニッパー・はさみなど

公文書に使われているホッチキスの針・クリップ・ピンなど金属類は、紙を破りやすく、錆びて文書を汚損するばかりでなく、錆による周辺部分の酸化によって紙が破れてしまうこともあるので取



ホッチキスで綴じてある文書



クリップで綴じてある文書

り除きます。ホッチキスの針や針金で綴じてある文書は、小さなニッパーなどで金具部分を起こして除去します。はずすときに不用意に押し広げると紙がちぎれてしまう場合があるので注意しましょう。紙に錆びたクリップが付着している場合は、クリアファイルの小片など薄いフィルム(多少腰のある滑りの良い薄い板状のもの)をクリップと紙の間に両面から差し込んでクリップを押し広げると、クリップが外れやすくなります。はずしたあとは、元の穴を利用して紙繕りや糸などで綴じなおします。クリップ綴じなどで穴のない文書は、ばらばらにならないよう中性紙で作った封筒などに入れておきます。

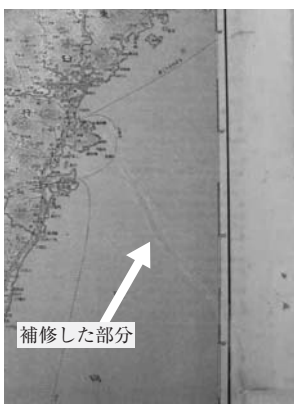
破れた地図や公文書の補修

用具 糊・修復用和紙・筆・ピンセット・不織布・重しなど

破れた地図や公文書は、破れた部分に修復用の和紙を貼って補修します。和紙は、楮和紙を使います。和紙の紙の目はタテ目で使用するか、補修する紙の目と合わせます。破損箇所より少し大きめに、水をつけた筆で

線を書き、水で濡れた線にそって和紙を手でちぎり、紙の周囲に繊維が出るようにします(喰裂き)。これで貼ったときに紙繊維が本紙とからみついてはずれにくくなり、修復部分の重なる違和感を減らすことができます。貼る前に破損部分を合わせ、ずれないようにしっかりと重しで押さえておきます。筆で破損部分に糊をつけ、その上から切り抜いた修復紙を貼ります。修復紙側に糊をつける場合は、筆で紙の中心から外側にむかって糊を塗ります。糊はなるべく薄く均一に塗ります。貼り終わったらピンセットなどで本紙に紙繊維をなじませ、余分な部分を取り除いて、上から染めばけなどでたたいてしっかりと押さええます。繕った部分は、そのまま乾かすと紙が膨潤してゆがみがでてしまうので、不織布(レーヨン紙など)等をあててしっかりと重しをしながら、十分乾燥させます。

また、①文書の片面に文字や地図がある場合は、裏側から補修する、②両面に文字や地図がある場合は、文字が透けて見えるように薄い典具帖紙(てんぐじょうし)を使う、③片面だけでは弱い場合は両面から補修する、④公文



補修した部分
破れた部分を補修した地図

書などで綴つてある文書の場合、下の部分に糊の水分がしみこまないように繕う部分の下側に厚紙やクリアファイルなどをはさむ、などの点に注意しながら作業を進めます。また文書が酸化して弱くなつてい部分には、カルシウム分を含む美柄紙を使うと酸化の進行を抑えることができます。

修復に使用する和紙について

文化財の補修には楮紙、三桧紙、雁皮紙などの和紙を用いますが、破損した部分の補修や裏打ちには楮和紙を使います。楮和紙は繊維が長く接着したときになじみやすく、しなやかで丈夫であり、長期の保存に適しています。楮和紙には機械漉き・手漉き・厚さ・色・風合いなど多種あるので、文書の破損状況や、その紙の種類・厚さなどを考慮しながら補修する文書に近い補修紙を選び、用途に応じて使い分けします。実際に文書に触つてみて、手触りなどで判断し、補修する文書と同じくらいの厚さのものか少し薄めのものを使うとよいでしょう。

和紙には紙の目と表裏があります。補修に使う場合は、タテ目で使用するか、補修する文書の紙の目にあわせましょう。また、つるつるして光沢のあるほうを表として使用します。

典具帖紙は、ごく薄手の楮和紙（土佐産）で、機械漉きと手漉きのものがあり、大変薄いので文字のある部分の補修などに使います。

（下向井祐子）

他館の紹介

—奈良県立図書情報館—

奈良県立図書情報館は、文書館（アーカイブズ）機能を併せ持った図書館として平成十七年十一月に開館した。昨年十一月にその内部を見学させてもらう機会があった。

最新の館らしく、外観はもとより、内部の設備も先端的である。中でも、国内最大級とされる自動書庫には（こういうものがあるとは知っていたが）驚かされた。同館のウェブサイトで動画を見ることができるので、インターネットを利用できる方は一度見ることをお勧めする。まるで何かの工場のようなのである。また、館名に「情報」と名のつくところ、多様な情報サービスを展開していることも特



奈良県立図書情報館外観

徴である（同館の『要覧』で知ることができるが、その全体を簡単に説明することは困難である）。

ただ、正直なところ、図書館としての機能と設備の新しさをサービスの特徴については、あまり関心が向かなかつた。以下は、公文書や古文書を収集・整理・提供する施設として、つまり、普通の文書館（アーカイブズ）機能を持つ施設として見た場合の、ごく狭い紹介（および感想）である。

所蔵する文書の量は、『要覧』によれば十九年度末で、公文書が一万点強、古文書が二万点強である（ただし地図を含む）。公文書の中には、戦前の郡役所文書が二三〇〇点余り含まれており、奈良県庁文書は八〇〇〇点弱である。明治・大正期の県庁文書が四〇〇〇点以上あるのが特徴で、広島県と比べると戦前の県庁文書は相当充実している。

一方、現在の奈良県庁文書については、保存年限の満了した五年保存以上のものが移管されると県の行政文書管理規則によって定められている。この規則に基づいて移管が開始されたのが平成十五年度からである。

さて、どの館であれ、文書館（アーカイブズ）として見た場合、いつも注目してしまうのは、収蔵する資料類について、その館がどのような情報を提供しているのか、あるいは、提供していないのかで



貴重書庫内部

ある。

奈良県立図書情報館が提供している情報として目に付くのは、やはり強力なウェブ検索である。インターネット上の所蔵資料検索は、今どき珍しくないけれども、公文書（県庁文書・郡役所文書）・古文書・絵図を併せて検索できる仕組みは、研究資料を探す者にとって思わぬ発見をもたらしてくれるかもしれない。もちろん、公文書だけ、古文書だけと限定した検索もできる。

一方、提供されていないものとして気がついたのは、見る（眺める）ことができる文書の目録である。ウェブ検索は、入力した条件に該当するものを引っ張り出し、リストにして見せてはくれるが、あるまとまりを持った文書群の目録を見ようとする時には、少し勝手が違うようである。たとえば、明治期の奈良県庁文